

ひじかたとしぞう 土方歳三の出生



土方歳三は、天保六年（一八三五年）五月に、武州多摩郡石田村（現在日野市石田）で生まれました。

石田村は、多摩川と浅川の合流する近くにあり、歳三の生まれたころの石田村は、水田の広がる十五、六軒の小さな村でした。村の全部の家が土方という苗字で、それぞれの家は、家号や呼名で呼ばれていました。歳三の生まれた土方家は、村では「大尽」と呼ばれ、当主は年人と名乗っていました。

歳三は、この大尽の何代目かの半人義兵の末っ子に生まれ兄さんが三人、姉さんが二人おりました。お父さんの義兵は、歳三の生まれる数ヶ月前に病気で亡くなるし、お母さんも歳三が六歳のときに亡くなってしまったため、歳三はお兄さんの母六夫婦に育てられました。歳三が十三歳の年（一八四〇）六月、大雨が続き歳三の家は、多摩川の洪水のため流されそうになりました。近所の人や遠くの村の人まできて大急ぎで家を解体して、今の処へ建て直したのが現在の土方家の家です。

その後、歳三は江戸へつち水公に出されましたが、巻頭とけんかをして一人で帰ってきてしまいました。

いしだきんやく
石田散薬

歳三は、十八歳のときまた上野広小路にあった仔細松坂屋へ奉公に出ましたが長続きしませんでした。歳三には、商人の性格が合わなかったのでしょう。

生家の土方家は、農家のかたわら「うちみや、くじき」に効く「石田散薬」という薬を作って売っていました。この薬は、土用の母の日に近くの多摩川や浅川に生えている「牛草」という野草を採って日影に干し、黒焼きにして粉にしたものでした。

この牛草の採集には、村中の人の子任いに来しました。この大勢の人を指揮するのは歳三が一番上手だったと伝えられています。

この頃の歳三は家で作った「石田散薬」を売り歩いたり、遠縁にあたる谷保村（現在国立市）の本田家へ「水産流」という書道習いに行ったりしていました。暇なときには、姉のぶの嫁入り先である甲州街道の宿場だった日野宿の名主・佐藤吾郎の家へ遊びに行ったりしていました。

吾五郎は、歳三より九歳年上の従兄弟で、歳三を弟のようにかわいがっていました。

剣術修行



享和二年（一八〇二）、この佐藤家の近所から火事がおこり、佐藤家の家も焼けてしまいました。この火事の最中におこった事件で、佐藤彦五郎はあやうく斬られそうになりました。このことがあってから彦五郎は、自分の身を守りまた黒船渡来後、さわがしい世の中から宿場の治安を守るため、「天然心流」の剣術師範・近藤周助を招いて、剣術を習いはじめました。

彦五郎はしだいに剣術に熱中し、自宅の長屋門の一部を改造して道場を造り、宿の若い者を集めて剣術のけいこにはげみました。安政五年（一八二八）秋には、鎮守（現在の八坂神社）に剣術上達を祈願する額を奉納するまでになりました。

歳三も佐藤家へ遊びに行こうとしたのに剣術を習うようになり、稽古を非常に熱心にしたのでみるみる上達しました。この頃剣術修行で知り合ったのが、近藤周助の養子近藤勇、沖田総司、井上源三郎、山南敬助たちでした。

井上源三郎は、日野宮北原に住み八王子千人同心・井上松五郎の弟で、温厚で物骨かな人だったと伝えられています。

浪士組上洛



歳三や源三郎が剣術に熱中して数年過ぎた文久二年（一八六二）の暮、江戸牛込町（一六六）の近藤勇の道場「試術館」に、「將軍徳川家茂が、翌年二月に上洛（皇居のある京都に上ること）することになり、將軍を警護するところざしのある浪士を募集することになった」との話が伝えられました。これは出羽の浪士、清河八郎が幕府に働きかけたものです。

これを聞いた近藤勇は、土方歳三や佐藤十郎に相談して、これに参加することになりました。

近藤道場の試術館からは、近藤勇、山南敬助、沖田総司、永倉新八、藤堂平助、原田左之助、日野からは土方歳三、井上源三郎、馬場兵助、中村太吉郎、沖田林太郎等が参加しました。

文久三年二月八日、伝道院に集まった浪士（浪士組）は二百三十数名で、中山道を通って京都へ向けて出発しました。

この頃の近藤や土方は、あまり名も知られておらず、近藤が宿割りの係りをしていただくくらいです。道中である事件もありましたが、ともかく一回無事、京都に着きました。

だんだら染ぞめの隊服たいふく

京都についた一行は、生村卿士の家に分宿しました。

ところが、清河八郎は、この浪士組を幕府の義軍にすると言い出し、朝廷へ上申書を提出してしまいました。驚いた幕府は、浪士組を急ぎ江戸へ帰しました。この清河の考えに反対した近藤、土方らと、弁沢ら十三名は京都に残りました。その頃の京都の町は、長州をはじめ諸国から集まった浪士攘夷を唱える浪士達が、意見の合わない人や、じゃまになる人を片端から暗殺し、三条河原には毎日のようにその首が晒されているという、とても物騒な町になっていました。

かねてから「日本は、朝廷と幕府が一体になって、外国に当ることがよい」と考えていた近藤、土方はこの有様を見て驚き、一緒に京都に残った十三人と共に、守護松平容保公に「ぜひ我々を、町の治安を護るため使ってください」と願い出しました。

守護職になってから京都の治安に心を痛めていた容保公は、喜んでこの願いを許し、近藤、土方達は市中の見廻りをするようになりました。さっそく隊士を募集し、浅黄色の地に、袖口を白のだんだらに染めぬいた細いの隊服を作り、同時に自分勝手な行動をしてはいけないという厳しい隊の規律を決め市中の見廻りを始めました。その頃隊は「壬生浪士組」と呼ばれていました。

（五）壬生 堂堂を昇ぶこと。

（正）二横糸 外敵（軍船）を退けはらう。入国、交際をこぼすこと。基本には、この両者を合わせた壬生二横糸は、討幕派の合言葉でもあった。

八月十八日の政変で 新選組となる



士生浪士組のはじめ頃の編成は、局長に芹沢鴨、新見錦、近藤勇、副長に土方歳三、山南敬助、副長助勤が沖田総司、永倉新八、井上源三郎ら十四名でした。八月十八日、京都から長州を追い出すため禁門の政変が起りました。浪士組約八十名は、赤地に白く「誠」の字を染めぬいた旗を先頭に隊列を組んで、会津藩の軍勢と一緒に行動しました。このとき、「浪士組」は、「新選組」と名付けられ、京都守護職松平健守御預り新選組となりました。

しかしこの頃の近藤や土方、井上達は、手当が少なくお金にはこまっていたようです。この人達にお金や品物を送りつけて働かすように頼助したのは、日野の佐藤亦五郎や多摩の人達です。

一方芹沢や新見は、次第にわがままになり、大きな商人から無理に金を借りたり、乱暴したりすることが多く、悪い噂が多くなりました。見かねた会津公は、近藤や土方に命じて芹沢や新見を肅清させました。その後の新選組は、局長近藤勇、副長土方歳三となりました。近藤や土方は、真面目に役職を守り京都の市中の警備にあたりました。そのため、京都の町は静かになりました。

浪士禁門の政変

文久二年八月十八日、京都御所御前

新門の警備に出る

ていた浪士達を、

近藤勇、会津藩等

が協力して京都か

ら退散した事件で、

同時に浪士派とい

われた、二条東本

等七人の公卿も長

州へ落ちていった

池田屋事件



しかし浪士達も、ただ黙っているだけではありません。密かに連絡をとり、計画を進めていきました。

「何か不穏な計画がある」と知った新選組は、古高俊太郎を捕えて、その計画を白日させました。その計画とは、「風の強い日を選んで御所の風上から放火し、そのどきくさにもまれて、天皇を長州へ連れ去って、幕府を倒そう」というものです。驚いた近藤や土方は、浪士の集まる場所を探しました。

元治元年（一八六二）六月六日、祇園祭りの宵山の夜、浪士達が集まることを知った新選組は、近藤勇、沖田総司、永倉新八の三隊が、三条の旅館池田屋を、土方歳三の隊が四國屋を襲いました。浪士約三十名は池田屋に集まっていた。四国屋は戦となり、四国屋に行った土方隊は浪士がいなかったため、すぐに池田屋へ引返し、近藤達に合流しました。近藤は、愛刀虎徹をふるい、新選組第一の剣士沖田総司は、刀の切先が折れるほど敵と渡り合っていました。時くせまい池田屋ではげしい戦は約二時間続き、肥後の宮御鼎蔵、長州の吉田松磨ら九名を斬り、その他大勢を捕えこの計画を鎮圧しました。世にいう池田屋事件です。この事件で明治維新が一年おそくなったともいわれています。新選組が起した最大の事件です。

はまぐりごもん たたかい
蛤御門の戦

池田屋事件の報せを聞いた長州藩は、前年の政変で京都を逃れ、今度は多くの長州人が捕えられたので京都から会津藩を逃いはらおうと、元治元年七月十九日、大軍で三方から京都へ攻め入り、その一隊は蛤御門から御所に向けて大砲をうち込みました。会津藩も薩摩藩と応戦し、はげしい戦いになりました。新選組は、九条河原に陣をかまえていましたが、御所方面の砲声を聞いて急いで御所へ向いました。しかし新選組が駆けつけた頃には、長州勢は多くの戦死者を残して逃げ去ったあとでした。

二十一日、新選組は逃げ残った敵の立てこもる山崎の天王山を攻撃し、真木和泉ら十数人は、自害してこの戦いは終りました。この戦いを「蛤御門の戦」といいます。

この戦いで、幕府は長州藩を「朝敵」として征伐することになりました。

この戦いののち新選組は、京都市中の取締りに一層精を出しました。のちの宮内大臣田中光顕が、「あの土方歳三が、役者のような顔で馬に乗って隊士を従え、するどい眼で市中の見廻りをしているのが一番恐ろしかった。土方がくると浪士は、露地から露地へ、夢中で逃げたものだ」と語ったとい

います。

屯所の移転とんしょのいてん

「池田屋事件」「蛤御門の戦」に活躍した新選組は、隊士も増加して今までの士生村の屯所ではせまくなつてしまいました。そこで西本願寺の集会所を借りて屯所を移転しました。

新選組の仕事も多くなり、局長の近藤勇は、毎日のように守護職や各藩の役人との会合で外に出ることが多くなりました。上方は、留守をあずかって新選組がますます強くなるように、隊士に剣だけでなく大砲や鉄砲など西洋式の訓練をさびしくしました。新選組は、男だけ百五十人から二百人の世帯です。生活も自然と不衛生になり病人等が多く出て回りました。そこで、幕府の御殿医、松本良順に來てもらいました。良順は、病室を作ることや、風呂場を多くすることなど衛生に關することを歳三に指示しました。歳三は、良順の指示をただちに実行しました。この歳三の行動力に良順もびっくりしたそうです。

しかし若い隊士達が、肉を煮るにおいを出したり、時には切腹をする人もあり、回った西本願寺では、近隣の不動堂村に新しい建物を建て、そこに移ってもらいました。

さんじょうこうさつじけん
三條高札事件



「蛤井門の戦」で朝敵となった長州藩は、幕府の第一回の長州征伐で恭順しましたが、藩内では新しい兵器を買い入れたりして、また戦う準備をはじめていました。幕府は、二回目の長州征伐を各大名達に命令しましたが、大名達の足並が揃わず、各地で苦戦をかさねました。

京都、三條大橋のたもとには、「長州藩は朝敵である」ということを書いた「高札」が建てられていました。ところが誰のいたずらか、この高札が、二回も抜かれて川に投げ捨てられていました。こまった町奉行所は、新選組に依頼して、この高札をまもってもらうことにしました。

新選組は、原田左之助ら約三十人が、三ヶ所に分れて警戒に当たりました。慶応二年（一八六六）九月十二日、月の明るい夜、土佐藩の若い侍八人が来て、高札を引きぬこうとしたので、警戒していた新選組隊士が、すぐにかげつけ、双方三十人程が入り乱れての大乱闘となりました。新選組は、このうち宮川助五郎みやがわすけごろうを捕え一人をたおし、他の土佐藩士は、皆大小の傷をうけながら逃げ去りました。

それからはこの高札に、誰も手をふれる者はありませんでした。

たいせいほうかん
大政奉還

徳川十四代将軍家茂は、かねてから病弱の体で国の政治をおこなってききました。慶応二年（一八六六）七月二十一日、病氣と心労が重なって、大坂で死去しました。また家茂を最も信頼されていた孝明天皇も、十二月二十五日に崩御されました。一ツ橋慶喜が、十五代将軍になり、明治天皇が即位されました。

この間、長州藩、薩摩藩、土佐藩などは、坂本龍馬の働きで手を結び、幕府をおす計画を進めていきました。そのため幕府の勢は日に日に衰えました。「大坂の頼れんとするや一本の支うるところに非ず」という言葉があるように、幕府を助けるための、会津藩や、新選組の人達の懸命な努力も、大きな時代の流れには勝てませんでした。

慶応三年十月、徳川慶喜は、天政を朝廷へ返上しました。十二月九日王政復古が号令され、小御所會議で、徳川慶喜の内大臣の位を奪いその上、領地を全部朝廷へ返上するように決ってしまいました。新選組は、京都を去って伏見奉行所の警備につきました。この年は、伊東甲子太郎らが、隊を脱退したりして隊士も少なくなっていたので、新しく隊士を募集して、近く始めると思える戦いにならなかった。

①一八六〇年戊辰の乱

②安政時代の昔のよう

③一八六〇年戊辰の乱

④一八六〇年戊辰の乱

すみぞめ
墨染の難

伏見奉行所の警備についてからも局長の近藤勇は、二条城に残る幕軍の人達との会合や、打合せに行く用事がたくさんありました。

この近藤に、十一月十八日油小路で暗殺された伊東甲子太郎の残党一味がつけわらっていました。

十二月十八日、二条城での打合せを終った近藤は、馬に乗り、十五人程の供を連れて竹田街道墨染にさしかかった時、待ち伏していた阿部十郎たちが物陰から鉄砲をうちかけました。弾丸は近藤の右肩に当りましたが、義文は近藤は、馬の上身を伏せ伏見奉行所へ降りすぐに医者の手当を受けました。しかし、肩の骨を砕いていてとても重く、伏見では治療できないので、かねてから病気の病気で休んでいた沖田總司と共に大阪城内で療養することになりました。伏見の新選組は、土方歳三が指揮することになり、井上源三郎も上方に協力して明日にも始まるかわからない戦いの準備を進めました。

一方、朝敵だった長州勢は、大砲を曳いてぞくぞく京都に入り、薩摩勢と共に京都に入る道に陣をかまえました。会津藩や新選組は、今までとまったく反対の立場に立たされてしまいました。

とばふしみ
鳥羽伏見の戦い
たか



このような情勢に怒った幕府は、京都から長洲藩や薩摩藩を遣いはらうため大軍を上京させました。この幕府軍が、三月三日、鳥羽街道小枝橋にさしかかったとき、薩摩軍が大砲を打ち込んだため戦争が始まりました。

伏見方面でも戦争が開始され、新選組は、近くの御寺宮に陣をかまえた薩摩軍と砲撃戦になりました。この砲撃で奉行所が燃え出し、新選組の苦戦となりました。土方は、会津軍と相談し四日明方、淀堤千本松へ陣を移して戦うことになりました。

ここでも土方をはじめ、井上源三郎達もはげしい戦いをくり返しました。戦いの最中、「幕府軍は、全員大阪へ引上げよ」という命令が伝えられました。その時、一全の銃弾が、井上源三郎の胸をつらぬき、源三郎はどつとたおれました。

井上源三郎の甥奉助は、近藤勇の小姓となり、十二歳でこの戦いに参加していました。この時の様子を、「おじさんは、弾丸に当たると手当をするひまもなく戦死してしまっただ。おじさんの首と刀を持って大阪へ向かって歩き出したが、首がとても重くて、「一緒にいた隊士に「奉助、その首を持っていて運れると、敵に捕ってしまふから、残念だが捨てる」といわれて、ある寺の前の田圃を掘って、首と刀を埋め大阪へ引揚げた。」と、語り残しています。

甲陽鎮撫隊

こうようちんぶたい



鳥羽伏見の戦いで敗れた新選組は、慶応四年(二六)一月十六日、大阪から富士山丸で江戸に帰ってきました。江戸で佐藤幸五郎に会った土方は、戦争の話しを聞いて「もう刀や銃の戦争ではなくなった」と新しい大砲や鉄砲の話しをしました。これを知った幸五郎は、すぐに農兵の有山重蔵を横浜に向かわせ、新式の元込銃二十丁を買ひ、二月一日から新しい鉄砲で農兵の訓練を始めました。

墨染で負った傷の治療のため、甲府の城をおさえ、官軍が江戸へ入るのを食い止めようと「甲陽鎮撫隊」を作り、約二百人の兵隊を集め三月一日、江戸を出発し翌日、日野の佐藤幸五郎の家で休憩しました。この頃の土方は、戦いに便利な仏蘭西式の軍服を着ていました。佐藤幸五郎や、農兵隊約三十人は、元込銃を持って「春日隊」を作り同行することになりました。

急いで静岡までいったとき甲府城にはすでに官軍が入城していました。やむなく静岡に陣をかまえ、土方歳三は、援軍を求めに江戸へ急ぎました。

この間に戦闘は開始され、春日隊の谷巴之助、和田勘五衛らもよく戦いました。しかし敵は大军でついに敗れ、鎮撫隊は江戸へ引揚げ、春日隊も日野へ降りましたが、隊士は散りじりにかくれしました。

こんどういさえ
さいご
近藤勇の最期



勝沼の戦いに敗れた近藤、土方は、生残りの隊士を五兵衛新田（現在足立区綾瀬）に移し、さらに新しく兵を集めたうえ流山に移動しこ

こで戦うつもりでした。しかし戦いの準備ができないうちに、薩摩の有馬頼太の率いる軍に取り囲まれてしまいました。甲州へ行くころから、大久保大和と名前を変えていた近藤は、「官軍へ出向いて何とかいいわけをして兵隊達を助けよう」と言い出しました。土方は、

泣いて行くのを止めましたが、近藤は板橋の官軍陣所へ出向き、近藤勇とわかって捕えられてしまいました。土方は、近藤を助けるため勝海舟らに頼んでまわりました。有馬頼太も近藤を助けたかったのですが、谷千城らが四月二十五日、板橋で近藤を処刑してしまいました。

「近藤は、刑場へ行ってからゆっくりとひげをそり、顔色も変えずに首を落された」と伝えられています。

近藤勇の首は、塩づけにされて京都に送られ三条大橋に、晒されました。

首は、その夜のうち誰かに持ち去られてしまいました。首を持っていったのは誰か、どこへ埋めたのか、いまだに判っていません。

あいざせんそう
会津戦争

近林と別れて流山を脱出した土方は、大島圭介ら幕府脱走軍に合流して、宇都官城に入っていた官軍と戦いました。城は落ちましたが土方は、足の指に負傷して、会津に治療に行くことになりました。

途中、今市で、日光勤王にかりのあきらに来ていた勤王騎兵きんべいで新井村（現在日野市新井）の八王子千人隊隊士・土方勇太郎（むらたけゆうたろう）と会い、形見の品を、生家へ届けてくれるように頼み、今度は無事で帰れそうもないから」といって北へ去っていきました。会津についた成三は、東山温泉で治療し、傷も治ったので、会津藩の前線部隊と母成峠（むなりとうげ）に出陣しました。

官軍の強大な兵力と武器を前に、会津軍は良く戦いましたが、母成峠での土方達の奮戦もむなしく、各地で敗れて鶴ヶ城へ籠城することになってしまいました。

会津では、少年達や女の人まで良く戦いました。

飯盛山で自刃した十六、七歳の少年達「白虎隊」の非しい話は、今も語り伝えられています。

会津鶴ヶ城は、九月十二日落城しました。それより前に土方成三は、奥州列藩同盟（おくしゅうれつはんどうめい）と力を合せて、会津を救うため仙台へ向っていました。

奥羽列藩同盟

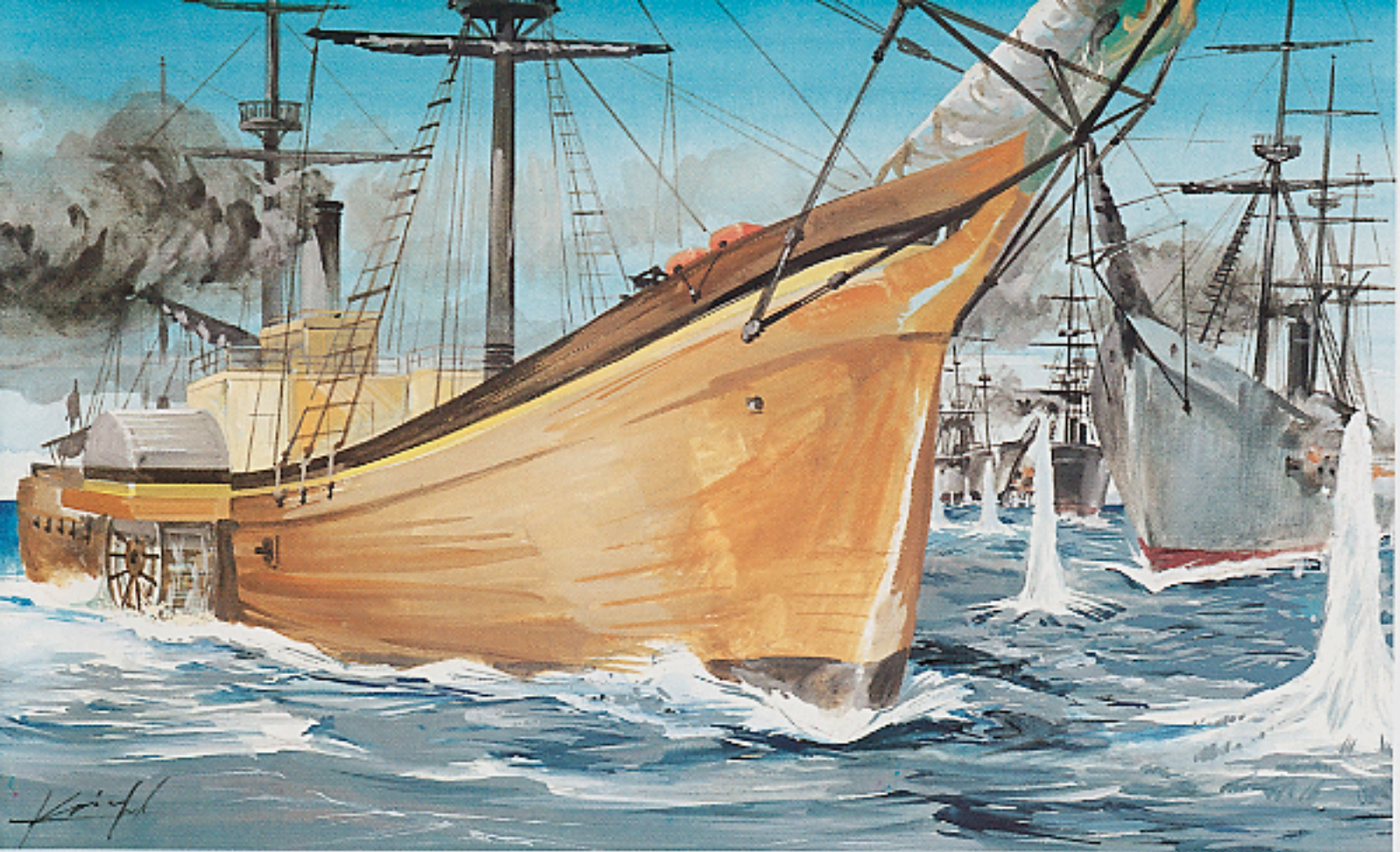
おおうれっぼんどうめい



仙台へ着いた土方が会ったのは、幕府の海軍奉行榎本武揚（榎本）でした。榎本は、幕府の軍艦六隻（榎本）で江戸を脱走して、仙台に来たのです。その頃、仙台側では、官軍と戦うか、恭順するかで迷っていました。

この仙台で開かれた奥羽列藩同盟の会議の席上、列藩同盟には、全軍を指揮する大将（榎本）がないので困っていました。すると榎本が、「私が推薦しよう」といって、土方成三を推薦しました。呼ばれた土方はすくつと立って、ぐるっと一庭（榎本）を見廻し、「お受けしましたよう、しかしお受けするからには、もし軍令にそむく者がいたら御大身（榎本）の人といえどもその時は、私の剣にかけて斬らねばならぬ、それでよろしいか」と言いきったそうです。しかし、奥羽列藩同盟も、仙台藩が恭順（榎本）に決定したため、足並が揃わなくなりませんでした。

土方達は、この有様に仙台を捨てて榎本の軍艦に幕軍二千人と一緒に乗り、突風（榎本）状を出帆して、新しい天地を求めて北へ向いました。

箱館戦争
はこだてせんそう

明治元年（一八六八）十月十一日、寒風沢を出航した土方たちは、二十二日、北海道鷹ノ木に上陸しました。

途中、小数の敵を追い散らしながら、二十六日、箱館五稜郭に入城しました。

土方は、敵を松前、江差と追い松前湾を降伏させて、五稜郭に凱旋しました。

五稜郭は、星の型をした新しい城です。ここで幕府は、新しい政府を作るため総裁以下の役職を選挙で決めました。総裁には、榎本武揚、副総裁松平太郎、海軍奉行荒井郁之助、陸軍奉行大島圭介、土方歳三は、陸軍奉行並という役に選ばれました。

寒い冬の間、官軍も北海道を攻撃できず、四月、江差方面に上陸して、箱館への攻撃を開始しました。土方は、江差方面から来る敵に備え、江差山道、二俣、台場山に陣を築いて、敵を迎えうちました。前に深い大野川の谷、その小高い山に築いた陣地からの銃撃に、官軍は一步も進むことができず、十三、四日間土方軍の爲くぎすけにされてしまいました。

しかし、松前方面で戦った大島圭介の軍は、敗戦に続く敗戦です。そのため土方軍は、このまま戦い続けると後方からの敵の攻撃をうける危険もでてきたので、残念なことに、二俣の陣地を捨てて五稜郭へ降りました。

ひじかたとしぞうせんし
土方歳三戦死



五稜郭に帰った土方歳三は、四方から箱館へ押しよせる敵と戦いましたが、常軍にじりじりと押されました。海軍も苦戦の連続です。土方は、小姓の市村鉄之助を呼んで、「これを日野の佐藤家へ届けるように」と一枚の写真を渡しました。市村は、泣いていやりませんが、無理に外国の船に乗せて帰しました。

五月十日、ついに官軍は、箱館の市中も占領してしまいました。そのため根本ら諸将の間に、降伏という話しも出はじめました。

近藤勇も、沖田総司も死に「死におくれた」といつていた土方は、五月十一日「弁天砲台の救援に行く」と部隊をひきいて、一本木関門から進撃をはじめました。弁天砲台には、京都以来苦楽を共にした新選組生残りの人達が、孤立して戦っていたのです。安富才介、沢忠助などはかの新選組隊士も何れも言わずこれに続きました。激しい敵の銃撃の中を一本木と異国橋の中ほどの鶴岡町あたりまで進撃しました。その時一発の銃弾が、馬上で指揮する土方歳三の下腹を貫きました。どっと馬から落ち、附近の衆家に運び入れられた土方は、村添った人達に「世話になった、すまぬ」と一言を致して、息をひき取りました。

明治二年（一八六九）五月十一日朝四ツ時（十時から十一時頃）のことです。三十五歳でした。

追慕



明治二年七月、日野の佐孫家へ、乞食婆の一人の少年が尋ねて来ました。家人がいぶかって尋ねると、持っていた包の中から一枚の写真と細い紙片をさし出しました。舟五郎とのぶがそれを見ると、歳三の写真なのでびっくりしました。紙片には「彼の者の身の上、（舟五郎の身の上）頼上（頼上）、義豊（義豊）（兵豊は歳三の健）（兵豊は歳三の健）」と書いてあり、この少年こそ土方の言いつけを守り、北海道から苦勞しながら写真を届けてきた市村鉄之助でした。この写真は、今でも佐孫家に大切に残されています。

明治も次第に落ちついてくると、多摩の人々の間に、幕末の戦乱の世に、（頼上）頼上、（義豊）義豊に殉じた近藤や土方のおこないを顕彰しようと、明治九年（一八七八）に、日野の佐藤俊正（舟五郎）、土方義弘、国立の本田定年、調布の近藤勇五郎、歳三の兄橋谷良徳、町田の小島為政、橋本政直など、近藤や土方に関係深い人達を中心にあって、碑を建てようとして計画しました。碑の額は、会津の松平容保公、（頼上）頼上、（義豊）義豊の文字は、松本順（良順）と新選組に関係の深い人によって書かれ明治二十一年（一八八〇）、高幡不動尊の境内に立派に建立され、盛大な慰霊祭がとり行なわれました。